

# 大学外諸機関との連携と学生の能動的学びを重視した 授業プログラムの開発・改善に関する一考察

— 本学管理栄養士養成課程における臨地実習の取り組みを通して —

大出 京子・佐藤 玲子・佐々木 南子・三戸 節子  
木村 豊子・芳賀 めぐみ・後藤 美代子・鈴木 道子

Discussion on the Development and Improvement of Curricula Emphasizing  
the Cooperation with Extra-university Institutions and Students' Active Learning  
— focusing on the field practice in the course for training national registered dietitians of  
Shokei Gakuin University —

Kyoko Ohide, Reiko Sato, Minako Sasaki\*, Setsuko Mito\*  
Toyoko Kimura\*, Megumi Haga, Miyoko Goto\*\*, Michiko Suzuki

本稿では、2003年に設置された本学管理栄養士課程における臨地実習の取り組みを通して、大学外諸機関との連携、ネットワークの形成、および学生に対する教育のあり方、特にその能動的学びを重視した授業プログラムの開発と改善の試みについて考察を行う。

本学の管理栄養士課程は2006年度に完成年度を迎え、2005年度及び2006年度に3年生を対象とした臨地実習が実施された。この間、管理栄養士課程開設のための所轄官庁への認可申請、臨地実習先の確保、他の管理栄養士養成校との連携、実習先との調整・連携強化にはじまり、学生に対する臨地実習事前指導、実習中の巡回指導、実習後の自己評価・報告会等の事後指導などを実施し、現状を分析することにより多くの課題が明らかになった。本学科では教員全員が巡回指導を担当するため、学科内FDを繰り返して行い授業改善を試みた。今後もよりよい授業プログラムの開発・改善に向けてさらなる努力が必要と考える。

キーワード 管理栄養士養成 臨地実習 大学外諸機関との連携 授業プログラム

## 1. はじめに

戦後60年余り、日本社会の変化は目覚しく、社会の多くの分野において急激な変革が迫られた。高等教育を含む教育分野および医療・保健分野、それらと密接に関わる栄養分野も例外ではない。

1947年に学校教育法が制定されて以来、我が国の「高等教育は世界的にも特異といってよいほど極めて速いスピードで量的拡大を果たした」とされ、主に私立大学に依存した形で大学はマス化し、大学は戦前のエリート養成から大きな転換を遂げたとされる<sup>1)</sup>。その結果、高等教育は多くの課題を抱えることとなったが、その一つは学生の質に見合った授業の創出と学生の評価を基にした授業改善である。また、大学以外の社会との連携やネットワーク作りも課題

---

\* 尚綱学院大学 総合人間科学部 健康栄養学科 非常勤講師

\*\* 尚綱学院大学 総合人間科学部 健康栄養学科 名誉教授

の一つである。

一方、日本人の寿命の延伸、少子高齢化社会進展の中で、教育、医療・保健分野でも大きな変化が生じ、その一端を担う栄養分野においても国民全体の低栄養から過栄養を含む多様な問題に推移する中で、栄養専門職の果たすべき役割についての社会のニーズの高まりは目を見張るものがある。そのニーズに応えるべく、2000（平成12）年4月7日（最終改正2001（平成13）年6月29日）に、栄養士法の一部を改正する法律が公布され、2002（平成14）年4月1日から施行された。その中で管理栄養士の役割が明確化されると共に、その養成カリキュラムに関して大きな転換があり、特に養成施設外での実習内容やシステムの変更は、上記高等教育の課題と無縁ではない。

本稿では、改正栄養士法施行の翌年に設置された本学管理栄養士課程における臨地実習の取り組みを通して、大学外諸機関との連携、ネットワークの形成、および学生に対する教育のあり方、特にその能動的学びを重視した授業プログラムの開発・改善の試みについての考察を行う。

## 2. 管理栄養士養成課程「臨地実習」を課題として取り上げる背景

### 1) 栄養士養成の経緯と改正栄養士法の意味

我が国における栄養士養成は1925（大正14）年佐伯矩が私費を投じて栄養学校を設立したことにより始まると言われる<sup>2)</sup>。1945（昭和20）年4月の厚生省令をもって栄養士規則が制定され、さらに1947（昭和22）年12月栄養士法が制定公布されることにより、栄養士は法的根拠を獲得する。栄養士法は数回にわたり改定されてきたが、特記すべき改定は、1962（昭和37）年に公布され、翌年施行された管理栄養士制度の創設に関わる改定と、2000年（最終改正2001年）に公布され2002年に施行された直近の改正（以下この改正による栄養士法を「改正栄養士法」と呼ぶ）である。戦前戦後を通じて食糧供給の少ない中、国民の大部分が低栄養であった時代、栄養士の役割は食物の有効活用を基盤とする栄養改善活動であったが、その後の経済発展、食糧供給の好転、国民の生活の多様化に伴い、我が国の栄養問題は、低栄養から過栄養、病態に応じた栄養供給ニーズと多岐にわたり、かつ複雑化してきている。我が国では、日本特有といわれる女子短期大学の発展とあいまって、専門職としての栄養士の明らかな需要と供給のアンバランスの中、多数の栄養士の養成がなされた。専門職として就業しないまでも多くの栄養士資格を有した家庭人が栄養改善に果たした役割は大きく、時代のニーズに応えた養成であったとも言えよう。また、管理栄養士制度が設立された後も、現実の職場の中では、栄養士との区別が必ずしも明確ではなかった。そのような流れの中で、栄養関連問題の複雑化に伴う社会からの要請のもと、栄養士のあり方が、20世紀末から「21世紀における管理栄養士等あり方検討会」を中心に検討され、2000年の栄養士法改正につながる。改正栄養士法では、管理栄養士の役割が明確化され、登録制から免許制に変更になると共に、国家試験受験資格が見直され、また、養成課程におけるカリキュラムの大幅な改正が行われた。このカリキュラムに基づく教育を基礎とする国家試験は2005年度末（2006年3月）から実施されている。改正栄養士法によれば、管理栄養士は①傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導②個人の身体状況、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導③特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体状況、栄養

状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導等を行うことを業とする者と定義された。管理栄養士養成施設卒業生以外であっても、実務経験を条件に管理栄養士国家試験受験資格は与えられるが、国家試験内容が新カリキュラムに則ったものである以上、管理栄養士養成施設卒業生が受験に当たっては有利な状況にあることは否めない。18歳人口の減少、高学歴化志向に伴い、多くの栄養士養成施設はその生き残りをかけて、改正栄養士法公布前後に、管理栄養士養成施設に転換している。また、管理栄養士養成施設の増加から、今後管理栄養士の過剰供給が懸念され、各施設がその特色を打ち出すコア・カリキュラムが検討され始め、管理栄養士養成施設間の競争の激化が予想されている。

## 2) 改正栄養士法のインパクト

改正栄養士法とそれに伴うカリキュラムの改正は管理栄養士・栄養士養成施設ばかりでなく、従前の栄養士法のもとで教育を受け、実務に就いている管理栄養士または栄養士にも大きなインパクトを与えた。特に、臨地実習の重視とその内容は、両者に多くの議論を呼び起こした。その理由について、管理栄養士養成施設の教員であり、(社)日本栄養士会の会長でもある中村は、多くの養成校で初めて新カリキュラムに基づいて臨地実習が実施された2004年度末(2005年)の時点で、以下の5項目をあげている<sup>3)</sup>。すなわち①今回の栄養士法改正の意義と趣旨が、いまだに養成校と現場の管理栄養士に十分理解されていないこと②管理栄養士の教員が少なく専門家教育が十分行われなかったこと③実習施設では日常業務が忙しく、学生実習に十分な時間がさけないこと④今回提案された管理栄養士の業務が現場で、まだ完全には実施されていないこと⑤管理栄養士養成施設の急激な増加にともない、実習先が確保できないことなどである。すなわち、実習先となりうる施設の管理栄養士若しくは栄養士は、多忙な日常業務の上に、現場で行われていない先進的業務について、多数の学生を対象に教えていかなければならないのではないかという危惧を抱き、養成施設側は、改正栄養士法に明記された内容の実習を実施してもらえないかという危惧を抱いた。この新カリキュラムは、特に管理栄養士の更なる専門職化を目指したものであるとともに、結果的には実習先である現場の業務内容の見直しや改善を迫るものとも考えられる。いずれにしろ、養成施設教員、実習先となりうる施設現場の管理栄養士・栄養士は、ともに、この新たなカリキュラム内容を学ぶことから始めなければならなかった。2002年4

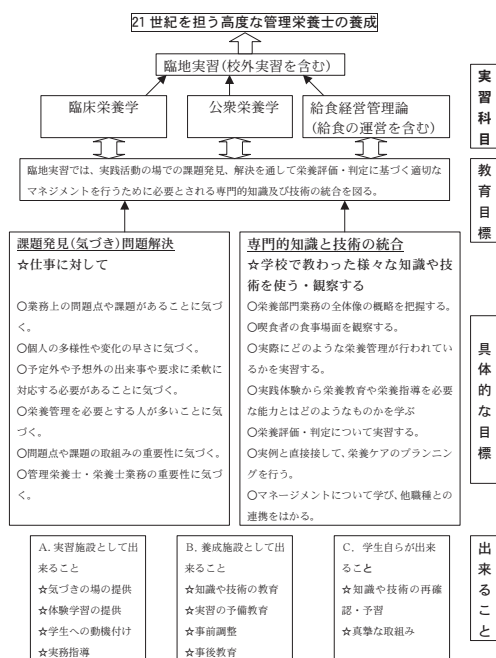


図1 実習科目と具体的な実習目標と実習施設と養成施設の関係(文献4より)

月、文部科学省高等教育局長と厚生労働省健康局長名で「管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習について」が各都道府県へ通達された。通達では、臨地実習の目的と共にその実施要領が示された。日本栄養士会は、新カリキュラムに沿って、生涯学習のプログラムを検討し、実施することとともに、全国で、養成校と実習施設の共同検討会が発足し、問題解決のための連携が始まった<sup>3)</sup>。その連携の中で、活用されたテキストが、(社)日本栄養士会と(社)全国栄養士養成施設協会が連携して、検討、作成した「臨地・校外実習の実際－改正栄養士法の施行にあたって－」<sup>4)</sup>である。この冊子は、総論と各論部分からなり、さらに各論部分は養成施設編と実習施設編に分かれている。総論では、実習の基本的事項が記され、実習科目と具体的な実習目標、実習施設と養成施設の関係が図1のように示されている。

### 3. 本学における臨地実習の取り組み

本学の管理栄養士課程は、2003年度に開設され、2006年度に完成年度を迎えた。この間、2005年度及び2006年度に3年生を対象とした臨地実習が実施された。中村が指摘した上記課題は、本学の臨地実習についてすべて当てはまるが、特に本学は栄養士法改正前後に急激に増加したと指摘される管理栄養士養成施設の1つであり、それまでの管理栄養士養成実績が乏しく、また、東北地方全体で5校存在する管理栄養士養成施設のうち本学を含む4校が宮城県内、その中でも仙台市及び隣接する名取市に存在し、実習先の確保の困難が当初から予測された。

2003年度から2006年度までの4年間は多くの課題を抱えながらの「臨地実習」という新たな授業プログラムの開発と授業改善の過程であり、試行錯誤の連続であった。

#### 1) カリキュラムの設定

本学では、臨地実習を「給食の運営」を含め、「給食経営管理論」「臨床栄養学」「公衆栄養学」の分野で4単位必修とし、3年生を対象とした。科目名、分野、単位配分、実習目的については表1にまとめた。なお、本学では4年生を対象として「臨地実習Ⅴ」がカリキュラムに設定されているが、選択科目であり、本稿では取り上げない。

表1 本学における臨地実習カリキュラムの概要

科目名	分野	単位数	実習施設	実習目標
臨地実習Ⅰ	給食経営管理論 給食の運営	1	小学校 中学校	各学校における給食の意義を理解し、年齢に応じた栄養基準量と献立作成、調理・盛り付け、学校給食の目標など給食全般を体験学習し、成長・発育期における食育について発達段階に応じた理解を深める
臨地実習Ⅱ	給食経営管理論 給食の運営	1	病院 老人福祉施設 児童福祉施設	各施設の給食の意義と対象者の特性を理解するとともに、給食マネジメントの基本を学習し、栄養管理者としての技術を修得する
臨地実習Ⅲ	臨床栄養学	1	病院 介護老人保健施設	栄養アセスメントに基づいた栄養ケアプランの作成、実施、評価に関する総合的なマネジメントの考え方を理解し、臨床の場における栄養・食事指導の実際を学ぶ
臨地実習Ⅳ	公衆栄養学	1	保健所 市町村保健センター	地域特性や住民ニーズに応じた公衆栄養の展開や公衆栄養マネジメント、地域栄養管理と保健・福祉・医療の連携など、総合的な地域保健栄養活動の実際について学ぶ

#### 2) 臨地実習の取り組みの概要

3年生に臨地実習を行うためには、それまでに実習に必要な科目を修得していなければならないが、本稿ではその内容には触れず、臨地実習に直接関わりのある取り組みについて述べる。



大出・佐藤・佐々木・三戸・木村・芳賀・後藤・鈴木：  
大学外諸機関との連携と学生の能動的学びを重視した授業プログラムの開発・改善に関する一考察

本学における臨地実習への取り組みは、本学科開設の前年2002年度に始まる。管理栄養士養成課程としての所轄官庁への認可申請に際し、臨地実習先を確保する必要があり、その候補先又は上部機関との調整を図った。特に厚生労働省への申請に際し、全ての実習先の承諾書添付が義務付けられ、文部科学省大学設置分科会の実地調査においても、実習先確保の状況について言及された。

実際の臨地実習は3年生対象であるので、2005年度から開始されたが、そこに至るまで種々の準備が必要であり、その経緯を含め、2006年度までの臨地実習に関わる取り組みの概要を表2に示す。

表2 本学における臨地実習取り組みの概要

年度	担当教員の学習と作業・会議等	実習施設への依頼と連携強化	学生に対する教育	学科全教員による共有
2002年度	実習施設の開拓・確保	協力依頼・調整、実習施設承諾書の依頼		課程申請に際し全教員参加の指導確認ガイドブック作成
2003年度	「臨地・校外実習の実際」の研修・確認	行政栄養士協議会、学校健康教育栄養士協議会会員に説明会実施		
2004年度	担当者会議の実施 「臨地実習の実際」(本学版)作成 「臨地実習の実際」(学生版)作成 「臨地実習記録」等諸様式の作成	行政栄養士協議会、地区栄養士会会員に説明会実施 教育委員会、行政栄養士協議会、臨床栄養士協議会等の実習担当指導者への説明会開催(2回) 次年度実習施設の内諾	2年生対象 臨地実習の概要をガイダンス	本学主催の実習先指導者への説明会に全教員参加
2005年度	担当者会議の実施 「臨地実習の実際」「臨地実習記録」等について、前年度の課題を基に改訂版作成	実習施設への正式依頼 実習内容の啓蒙、連絡調整 巡回指導時における実習先指導者とのコミュニケーション 情報交換会の開催、実施 次年度実習施設の内諾	3年生対象 事前指導(個別指導含む) 巡回指導 事後指導 「食へのパスポート」発行	巡回指導への全教員参加 報告書の作成 反省会
2006年度	担当者会議の実施 「臨地実習の実際」「臨地実習記録」等について、前年度の課題を基に改訂版作成	実習施設への正式依頼 巡回指導時における実習先指導者とのコミュニケーション 反省会開催並びに研修の場の提供 情報交換会の開催、実施 次年度実習施設の内諾	3年生対象 事前指導(個別指導含む) 巡回指導 事後指導 「食へのパスポート」発行	巡回指導への全教員参加 報告書の作成 反省会

表3 学外諸機関との連携

年度	宮城県管理栄養士・栄養士養成施設連絡協議会	宮城県・東北厚生局	教育委員会等	実習施設	宮城県栄養士会
2002年度	既養成施設に対して、管理栄養士課程を申請中であることを説明、理解と協力を求めた	管理栄養士課程申請に当たり、臨地実習施設確保の指導があり、実習施設の承諾書添付が義務付けられた それに伴い実習協力依頼を要請した	仙台市教育委員会、仙台市保育課に実習依頼、承諾書を要請した 同じく岩沼市、塩竈市、古川市各教育委員会に依頼、要請した	各実習施設に出向き実習依頼、承諾書を依頼した	共学化の管理栄養士課程申請に当たり、出口確保の協力を依頼した
2003年度	連絡協議会を代表して、「臨地・校外実習の実際」を用い実習施設に説明、協力を依頼した			改正栄養士法に基づいた臨地実習の説明に向き、実習受け入れを依頼した	
2004年度	実習施設に対し、実習内容の啓蒙活動を行った 連絡協議会担当校として協議会開催、実習施設、時期、人数等の調整を行った 分科会でさらに実習企画調整、課題の確認を行った 担当校として協議会会則作成を提案、中心となって実施した	連絡協議会担当校として次年度実習依頼、調整を行った 県外実習施設(保健所)への説明、調整等、情報交換に出向いた	連絡協議会として仙台市教育委員会、仙台市保育課に次年度実習依頼、調整を行った さらに本学独自に岩沼市、塩竈市、古川市各教育委員会に次年度実習依頼、調整を行った	各実習施設の実習担当指導者への説明会を開催(2回)、実習内容の理解と協力を依頼した この説明会には宮城県の管理栄養士養成担当者及び仙台市教育委員会担当者も参加した	
2005年度	連絡協議会に参加、実習の課題確認と、次年度の実習調整を行った	連絡協議会から次年度実習依頼調整を行った 新たな県外実習施設(保健所)及び県内市町村保健センターへの依頼、情報交換に出向いた 総合演習Ⅰの事前指導に講師派遣を依頼した	連絡協議会として仙台市教育委員会、仙台市保育課に次年度実習依頼、調整を行った 岩沼市、塩竈市、大崎市各教育委員会に次年度実習依頼、調整を行った 事前指導に講師派遣を依頼した	実習施設への正式依頼に伴い実習内容の連絡調整を詳細に行った 学生の実習記録、事後報告書、巡回指導報告書等のフィードバックを図り、施設との連携を得ながら次年度の実習がよりよいものとなるよう努めた 実習終了後に情報交換会を開催、実習の反省、課題整理とともに施設間の情報交換をバックアップした 次年度予定の新たな実習施設にも参加を呼びかけた 事前指導に講師派遣を依頼した	
2006年度	連絡協議会に参加、実習の課題確認と、次年度の実習調整を行った	連絡協議会から次年度実習依頼調整を行った 新たな県外実習施設(保健所)への依頼、情報交換に出向いた 総合演習Ⅰの事前指導に講師派遣を依頼した	連絡協議会として仙台市教育委員会、仙台市保育課に次年度実習依頼、調整を行った 岩沼市、塩竈市、大崎市各教育委員会に次年度実習依頼、調整を行った 事前指導に講師派遣を依頼した	実習施設への正式依頼に伴い実習内容の連絡調整を行った 特に新たな施設には説明に向き、内容の充実を図った 今年度より栄養教諭教育実習が開始されるため、教育委員会と協議の上、臨地実習Ⅰ終了後に反省会を開催、研修の場を提供した また前年度と同様に情報交換会を開催、施設との連携を図った 事前指導に講師派遣を依頼した	

なお、他の管理栄養士養成校との連携および実習先との調整・連携強化に関しては、表3に詳細を示す。宮城県には2003年度において管理栄養士養成校4大学（栄養士養成校として5大学）が集中して設置されている。したがって実習先の確保・調整のために、以前から実施していた栄養士養成施設連絡協議会（本学を含め3大学で構成）を発展させ、5大学で構成する「宮城県管理栄養士・栄養士養成施設臨地実習・校外実習連絡協議会」を立ち上げ、連携を図った。また実習調整に関わる所轄官庁や各実習先の担当者を対象に実習内容の説明会や情報交換会を開催し、協力と理解を求め、連携強化に努めた。

### 3) 臨地実習の具体的内容

臨地実習事前指導を含む実習前、実習中、事後指導を含む実習後の取り組みの具体の概略を表4に示す。総合演習Ⅰにおける事前指導では、専門的内容に入る前に、一般的な注意事項等について細かく指導している。具体的には、①実習に出向くための心構え ②実習先との打ち合わせについて ③服装・身だしなみ・言葉使いについて ④電話・FAXのかけ方 ⑤事前報告書の書き方 ⑥持ち物 ⑦健康に関する注意 ⑧交通手段 ⑨事故・けががあったときの対応 ⑩実習日誌の書き方 ⑪挨拶の仕方 ⑫実習後の礼状の書き方 などである。

表4 本学における臨地実習の具体的内容の概要

科目名	実習前の取り組み	実習の実施状況	実習後の取り組み
全 体	1) 総合演習Ⅰにおける指導 社会人としての基本的態度の指導 実習先の業務内容等理解のための教育 実習先からの外部講師の授業 情報提供など 2) 実習グループごとまたは個別指導 社会人としての基本的態度の指導 実習先指導者との連絡に関する指導 自主課題に関する指導 巡回担当教員との連絡に関する指導	1) 実習先のカリキュラムに沿って実施 2) 教員が巡回指導を行い、その状況を確認し、問題等がある場合は解決に向けての努力を行う 3) 臨地実習記録（実習日誌）記入	1) 学生の自己評価作成の指導 2) 諸調査、自主課題、実習のまとめ、報告書等作成に関する指導 3) 報告会の開催 学生による発表と教員による講評 4) 「食へのパスポート」原稿の作成と発行 5) 次年度の実習内容について実習先と検討 6) 授業内容と実習成果との統合
科目による 特記事項	臨地実習Ⅰ	①厨房における給食管理・大量調理、HACCPによる衛生管理の実際を体験する ②給食時間における食育、食事指導、栄養指導の体験 ③地産地消の教育の実際 ④経営管理・帳簿・給食日誌等の作成	
	臨地実習Ⅱ	①給食マネジメントの基本を理解する ②老人福祉施設入所者の心身機能状態、栄養状態の評価の方法、栄養ケアプランの作成を学ぶ ③児童福祉施設入所者の発達段階に応じた給食の配慮や食育の取り組みについて学ぶ	
	臨地実習Ⅲ	①実習施設の指導者やグループリーダーと担当教員との連携 ②学生が必要とする情報や資料の提供 ③施設による実習カリキュラムの格差	
	臨地実習Ⅳ	①実習先と担当教員でのカリキュラムの評価・検討 ②学生が主体的に公衆栄養活動プログラムを実践 ③実習成果が地域の栄養活動に還元されている	実習成果のデータベースづくり

管理栄養士の仕事は、施設によって全くと言っていいほど、内容が異なっている。したがって、それぞれの施設の特徴をしっかりと理解させた上で、各実習施設の実習に臨まなければ効果があがらない。そこで、本学では、学内の専門分野の教員がガイダンスや講義を行い、さらに、具体的に現場の様子が理解できるように、各分野の施設の管理栄養士を講師として迎え、実際面からの講義を依頼している。

総合演習Ⅰにおける集団での指導のほか、各施設ごとのグループ指導、個別の自主課題等に

大出・佐藤・佐々木・三戸・木村・芳賀・後藤・鈴木：  
大学外諸機関との連携と学生の能動的学びを重視した授業プログラムの開発・改善に関する一考察

については個別指導を実施している。自主課題については、実習目標の課題発見(気づき)問題解決の1つとして、学生自らが考え、実習施設との協議の上で実習期間中に調べ、事後レポートにまとめている。また、実習先で実施されたプログラム内容は多様であるが、代表例を表5(1～3)に示す。

実習後は直ちに実習先への礼状を出すよう指導している。また、分野ごとの報告会を開催し、学生教員ともに実習内容の評価を行っている。

表5-1 臨地実習プログラムの例(臨地実習Ⅰ 小学校)

日 程	月 日	実 習 内 容	
		午 前	午 後
実習前 オリエン テーション	〇/〇 (金)		1 挨拶(校長・栄養士) 2 給食時間各教室見学 3 校長・教頭・栄養士の講話 4 実習日誌・課題について説明 5 実習日誌と実習の注意事項 6 給食室見学
1日目	〇/〇 (月)	1 紹介・挨拶 職員(職員室)児童(放送) 2 実習日程の説明 3 給食管理実習 施設設備状況把握 諸機器の取り扱いについて 調理作業	1 学級実習:給食準備状況見学・給食状況見学 残食状況調査 2 校長講話「教育目標」等 3 給食主任講話「給食指導」 4 栄養士講話「衛生管理」 5 実習記録記入 提出
2日目	〇/〇 (火)	1 給食管理実習 衛生管理の実際 作業員の衛生管理・健康管理 調理室の環境 作業場の衛生管理 下処理・調理・配食 給食の確保	1 学級実習:給食準備状況見学・給食状況見学 給食状況見学 3分栄養指導 後始末指導 2 下膳状況見学 残食調査 3 教頭講話「学校組織と運営」「学区地域社会」 4 栄養士講話「給食用物資」「検収」 5 栄養指導準備 6 実習記録記入 提出
3日目	〇/〇 (水)	1 給食管理実習 物資検収 洗浄 調理 配食	1 学級実習:給食準備状況見学・給食状況見学 2 養護教諭講話「学校保健」 3 栄養士講話「献立作成」「栄養管理」 4 栄養指導準備 5 実習記録記入 提出
4日目	〇/〇 (木)	1 給食管理実習 作業工程 作業の効率化 洗浄 調理 配食	1 学級実習:給食準備状況見学・給食状況見学 栄養指導 2 栄養士講話「作業管理」「献立と作業工程」 「事務管理について」「地域社会に対する栄養指導」 3 調査統計・栄養指導資料作成 4 実習記録記入 提出
5日目	〇/〇 (金)	1 給食管理実習 机上と実際の比較 作業の指示 保存食・残留塩素測定 洗浄 調理 配食	1 学級実習:給食準備状況見学・給食状況見学 栄養指導 2 調査研究まとめ 3 反省会 4 実習記録記入 提出

表5-2 臨地実習プログラムの例(臨地実習Ⅲ 病院「臨床栄養学」2週間の例)

日 程	月 日	実 習 内 容		備 考
		午 前	午 後	
実習前オリエンテーション		①実習の確認事項・注意事項 ②実習計画と事前準備(事前学習)について ③施設別の特徴に沿った学生個人別の自主課題設定(研究的取組み)		医療施設の診療科の特徴・受診・入院対象患者等を考慮
1日目	〇/〇 (月)	施設における食事療養・運営管理業務の概要、施設内の把握	指導者からの実習中の自主課題提案とアドバイス 嗜好調査票作成	全般的説明・注意 実習スケジュール
2日目	〇/〇 (火)	特別治療食調理実習、治療食献立作成、調理(一般食から特別食への展開など) 個人対応の栄養・食事管理	ベッドサイド訪問・患者面接による喫食状況調査への同行 カルテの見方、記録の方法	施設内医療情報のシステム化と食事 オーダー管理業務
3日目	〇/〇 (水)	講義:臨床検査値の理解と治療食への対応、治療用食品の利用、薬と食品(栄養)、疾患との関係	糖尿病教室への参加 (事前課題→栄養教育・指導のための教材作成)	傷病者の個別・集団栄養食事指導の 計画と実施、報告書の作成
4日目	〇/〇 (木)	特別治療食調理実習	個別栄養食事指導の見学 食事療養業務関係帳票の説明	食事療養制度に関する理解
5日目	〇/〇 (金)	講義:疾病別臨床栄養管理、栄養アセスメントの 実際とケアプラン作成、実施と評価について	NSTカンファレンスへの参加 (傷病者経腸栄養剤の利用、栄養補給方法の検討など)	チーム医療における管理栄養士の役 割と活動
6日目	〇/〇 (月)	臨床検査値の説明 病態パラメータと栄養パラメータ	NSTラウンド同行	医師、コメディカルスタッフなど職種 間との連携
7日目	〇/〇 (火)	一般食調理実習 嗜好調査実施	嗜好調査回収・集計 結果報告書作成	調理室での実習と調査
8日目	〇/〇 (水)	特別治療食調理実習	栄養委員会の見学 (嗜好調査結果報告など)	調理室での実習と委員会の見学
9日目	〇/〇 (木)	実習のまとめ	栄養職職員研修会への参加(栄養委員会報告、嗜好調査報告、その他報告事項・献立検討)	栄養課関連会議への参加
10日目	〇/〇 (金)	実習のまとめ	実習を振り返っての総括 まとめの報告と感想	まとめ

表 5-3 臨地実習プログラムの例（臨地実習Ⅳ 保健所）

日 程	月 日	実 習 内 容		備 考
		午 前	午 後	
実習前オリエンテーション		① 実習の確認事項について ② 実習計画及び事前準備について ③ 実習生へのアンケート実施 主な業務の概要を把握し、実習が円滑に行えるよう理解する		
1 日目	〇/〇 (月)	◇部門内、関連部署への挨拶 ◇講義 ①保健福祉事務所業務 ②食品薬事班業務 ③母子障害班業務	◇仙南栄養士会行政部会に参加 ・地区栄養士の部会活動についての理解	
2 日目	〇/〇 (火)	◇講義 ①成人高齢班業務及び地域保健活動 ②健康対策班業務 ③特定給食施設指導	◇食品工場見学 ・食品製造過程の衛生管理・品質管理	
3 日目	〇/〇 (水)	◇講義 ①県民健康・栄養調査 ②食環境整備創造事業	◇所外見学 健康づくりサポートおもてなしの店	
4 日目	〇/〇 (木)	◇講義 ①栄養士会活動 ②仙南ヘルスメイト	◇参加 仙南栄養士会福祉部会勉強会	
5 日目	〇/〇 (金)	◇講義 ①健康増進法に基づく食品表示及び虚偽・誇大広告の禁止 ②みやぎ21健康プラン及び健康の日フォーラム	◇県民健康・栄養調査準備 ◇実習反省会・まとめ等	

#### 4) 臨地実習に関する学生の評価・感想

各臨地実習終了後は、学生たちに自己評価アンケートを記入させると共に、自主課題を含め、臨地実習全体の感想・反省を提出させている。図2（1～3）に、臨地実習Ⅲ終了後の自己評価結果を示す。

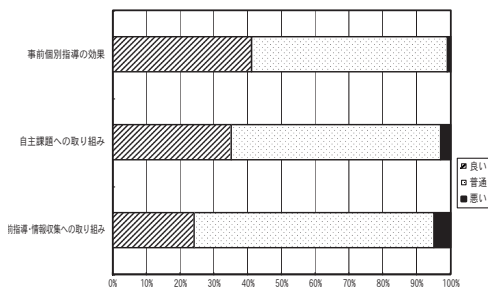


図 2-1 学生による自己評価結果：事前準備について

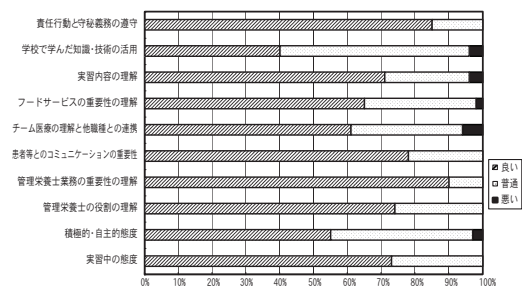


図 2-2 学生による自己評価結果：実習中の取組み

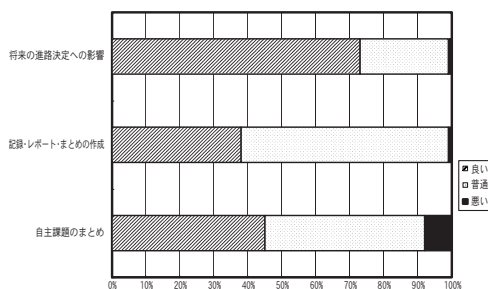


図 2-3 学生による自己評価結果：実習後の取組み



学生による事前準備についての自己評価は、反省の思いもあるのかかなり厳しい捉え方をしていることがわかった。自主課題への取り組み、事前の情報収集がしっかりでき「良い」と評価している学生は20～30%で、ほとんどの学生は「普通」と答えている。実習中の取り組みについては、管理栄養士業務の重要性を理解し真面目に取り組んだことを評価している。しかし、「大学で学んだ知識・技術の活用が十分なされなかった」「積極的・自主的な行動がやや欠けていた」などの反省もあった。ほとんどの学生は、実習後の意識として、将来の進路を決定する上で大きく影響を受けていることがわかる。

学生たちが取り組んだ自主課題の一部を表6に示す。

表6 臨地実習自主課題例

科目名	自 主 課 題 (例)
臨地実習Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校栄養職員の子どもたちへの栄養教育活動について</li> <li>・給食時の栄養教育</li> <li>・実習施設における食品購入実績のABC分析による食品重点管理の企画立案</li> <li>・学校給食システムにおけるIT活用の概要と特徴</li> <li>・HACCPにもとづく給食の衛生管理について施設面とソフト面の概要と特徴を調査してまとめる</li> <li>・調理作業における人員配置と作業管理の観察と考察</li> <li>・給食時間における児童生徒とのふれあいや観察を通して学校給食の意味を考える</li> </ul>
臨地実習Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育所におけるアレルギー児への対応</li> <li>・発達段階に応じた食形態について</li> <li>・保育所における食育活動の実際</li> <li>・高齢者にやさしい食形態、嚥下食について</li> <li>・高齢者低栄養予防と改善の実際</li> <li>・常食から展開する治療食の実際について</li> <li>・栄養アセスメントに基づく食事提供と栄養教育について</li> </ul>
臨地実習Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チーム医療における管理栄養士の業務、役割と他職種との連携について</li> <li>・クリニカルパス導入の効果と栄養士の役割について</li> <li>・緩和ケアにおける管理栄養士の役割について</li> <li>・病棟訪問や病棟回診の現状と栄養士の役割について</li> <li>・栄養部門のフードサービス強化における栄養士の役割について</li> <li>・慢性腎不全の食事管理と栄養指導の実際</li> <li>・透析患者におけるQOLを向上させるための管理栄養士の役割と取り組み</li> <li>・経腸栄養からみる栄養食事管理の実際</li> <li>・低栄養患者へのNSTの介入について</li> <li>・NCMと個別対応食について</li> </ul>
臨地実習Ⅳ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みやぎ21健康プランにおける食環境整備事業の実際</li> <li>・行政栄養士が地域に果たす役割とは何か</li> <li>・国民健康栄養調査の重要性と今後のあり方についての検討</li> <li>・保健所における管理栄養士と他の職種との連携による業務について</li> <li>・災害時、災害対策における管理栄養士の役割について</li> <li>・地域栄養活動における食生活改善推進員、保健推進員の育成と連携について</li> <li>・住民参加による健康づくりと地域づくりについて</li> </ul>

各科目の目標設定、各実習施設の特長性により自主課題は多岐にわたっている。学校給食における実習（臨地実習Ⅰ）では、給食の運営、栄養士業務の分析、HACCP<sup>①</sup>に基づく衛生管理、児童・生徒とのコミュニケーション、栄養教育活動などが主となっている。児童福祉施設や高齢者福祉施設における実習（臨地実習Ⅱ）では、発達段階や対象者にあったフードサービスの実際を課題としている学生が多かった。臨床栄養学分野の実習（臨地実習Ⅲ）では、人間栄養学の実践者としての管理栄養士を養成する必要から、高度の専門性が要求される。各病態における専門の知識、NST<sup>②</sup>の介入、NCM<sup>③</sup>と個別対応食、フードサービスの強化など、いずれも治療の一部としての目標を理解するためのテーマとして、多岐にわたる課題に取り組んでいることがわかる。また、公衆栄養学分野（臨地実習Ⅳ）では、食環境整備、地域と栄養士のかかわり、地域住民の健康づくりなどの実際をテーマとして取り組んでいる。関心のあるテーマについて学生の視点からまとめることにより、いままで気づけなかったことに気づき、問題解決

① (Hazard Analysis Critical Control Point 危害分析重要管理点方式)

② (Nutrition Support Team 栄養サポートチーム)

③ (Nutrition Care Management 栄養ケア・マネジメント)

表 7 実習後の学生の感想・反省例

科目名	感 想 ・ 反 省 (例)
臨地実習Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手洗いの徹底、汚染区域と非汚染区域の区分、着衣・履物の消毒などを体験し、衛生管理の徹底を知った。</li> <li>・ HACCP に基づいた具体的な調理作業（食品の中心温度測定・記録）、エアークリーン、エアーカーテンを体験した。</li> <li>・ 自分たちの献立を実施し、机上での献立作成とは全く異なること、大量調理と少量調理の違いを知った。</li> <li>・ 大量調理の一方で、アレルギー児童のために除去食を作るなど個別対応していたので感心した。</li> <li>・ 栄養指導、児童・生徒が主体的に取り組む内容を盛り込む必要があることを知った。</li> </ul>
臨地実習Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 声の出し方、話しかけ方、言葉遣いの工夫が足りなかった。</li> <li>・ 講義で学んでいた献立の展開の知識を実際に活かすことができた。</li> <li>・ 他職種との連携の重要性を強く感じた。</li> <li>・ 食物アレルギー児、障害児への食の対応の難しさを知った。</li> <li>・ 児童福祉施設における食育は知識を教えるよりも、習慣を身に付けることが大切であると実感した。</li> </ul>
臨地実習Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 病院における管理栄養士の役割と重要性を強く感じ、自分の目指す栄養士像を明確にすることができた。</li> <li>・ チーム医療における管理栄養士の役割や他職種との連携を学ぶことができた。</li> <li>・ カルテを読み取る能力など専門的な知識の必要性を感じた。</li> <li>・ 実際に臨床の現場を見て大学の講義で得た知識や技術が臨地実習により統合された。</li> <li>・ コミュニケーション能力や応用力が重要であることに気づいた。</li> <li>・ アセスメントの実施により、個人対応がきめ細かに行われていることに驚いた。</li> <li>・ 学内の事前個別指導で実習施設についての予備知識を得ていたのがよかった。</li> <li>・ 集団栄養指導を実習して、疾病についてはもちろん患者の心理状態や食行動についても学ぶ必要を感じた。</li> <li>・ 介護老人施設では臨床栄養も必要だが、介護に関することを学ぶ必要も感じた。</li> </ul>
臨地実習Ⅳ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 行政栄養士として働くには地域の特長や住民のニーズを把握することが大切だと改めて感じた。</li> <li>・ 実習期間中に研修会に参加し、事後評価も一緒に行い、plan → do → see の流れが良く見えた。</li> <li>・ ライフステージすべてにかかわりを持つ行政栄養士は、幅広い知識とそれを活かす技術を持つことが重要であると感じた。</li> <li>・ 低栄養予防の講話、歯科検診での栄養相談を実施し、多くの情報収集、学びが次への自信につながった。</li> <li>・ 対住民ということもあり、住民との信頼関係の大切さを実感した。</li> </ul>

への取り組みが培われていくものと考えている。

実習後の学生の感想や反省の一部を表 7 に示す。各分野における専門性は勿論であるが、それ以前に栄養士としての人間性、コミュニケーション能力、住民や入所者、患者との信頼関係が大切であるとの感想も多かった。

## 5) 臨地実習報告書「食へのパスポート」にみる臨地実習の実際

実習生たちは夏休みも返上し各担当分野の教員や現場での多くの指導者の指導を受け、臨地実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの実習を終え、4 単位を履修する。その実習成果と貴重な体験をまとめたものが「食へのパスポート」<sup>5) 6)</sup> である。

初年度（2005 年度）は各自、4 単位の実習の中から特に印象の深い実習を選択し、自由記述で、主として感想・まとめを作成させた。事前に準備したことがうまく表現できたこと、一生懸命話したことが受け入れてもらえたことの感動など、大きな収穫を豊かに表現している。しかし、実習内容の具体的な取り組みや自主課題のまとめ等がうまく表現されず、感想文に終始してしまった感があった。そこでこの反省を踏まえて 2 年目（2006 年度）の内容は①自主課題のまとめ②指導案③教材（紙芝居、ペープサート、パネル、ポスター、卓上メモ、メッセージカードなど）④ある日の実習記録⑤感想文⑥実習中の調査や研究のまとめ等の中から、テーマを決めて 1 つまたは 2 つを選んで作成するよう指導した。学内の授業では味わえない現場での緊迫感、管理栄養士、栄養士としての責任の重さややりがい、栄養指導に用いた指導案や教材の紹介など、写真・イラストなどを上手に織り込み、個性豊かな文章で実習の感動や驚きを綴っている。実習成果がより視覚的に理解できるような冊子に仕上がりと、読み進むほどに学生の実習中の姿、取り組みが直に伝わってくる。一冊の冊子にまとめたことにより、学生たちにとって一生忘れることの出来ない貴重な宝となったことであろう。学生一人ひとりがこの「食へのパスポート」を今後どのように活かしていくか期待したい。

#### 4. 考察

##### 1) 先行報告・研究について

2004年度末、2005年2月号で「臨床栄養」（医歯薬出版）は、「臨地実習の実際と今後」の特集を組んでいる。前述の中村による「いま、なぜ臨地実習なのか」を皮切りに、養成施設側から実習分野別に3編<sup>7) 8) 9)</sup>、さらに、実習先である病院側から3編<sup>10) 11) 12)</sup>の報告・提言がなされている。いずれも、その年度に初めて実施された新カリキュラムに則った臨地実習の内容が記されている。

関東学院大学の松崎は、周到な準備の末行われた臨床栄養分野の初めての臨地実習による大きな成果とともに、施設間格差などの問題が明らかになったことを報告している<sup>7)</sup>。病院を中心とした実習施設における委託化、人員配置による現場における日常業務の厳しさを十分承知の上で、一大学の枠を超えた研究会の設立や、実習先の学生指導者に対して、特別講義の依頼や臨床実習教授等の制度を確立し、実習指導者に対して一定の評価システムを構築していく考えを示している。

女子栄養大学の西村らは、2004年度を目標に、2002年から教育プログラムの検討をしてきたと述べ、大学における教育体制を「事前学習」「現地での実習」「事後学習」の3部構成とした上で、公衆栄養学分野のその具体について述べている<sup>8)</sup>。臨地実習プログラム開発に当たっては、2002年度に、学生のニーズ把握調査および旧カリキュラムの実習における学生たちの自己評価を検討した上で、2003年度に適切な実習時間設定のための調査を行っている<sup>13) 14)</sup>。それらの結果から開発された教育プログラムを実施した2004年度の成果については、臨地実習先の指導者も多数参加した上での報告会を大学全体の学事として位置付け、実施したと述べている。

天使大学の山部は、給食経営管理論に関しての報告と、実施後の課題について述べており、上述の二人と同様、実習先との連携の重要性を強調している<sup>9)</sup>。

横浜船員保険病院栄養管理室の梅澤<sup>10)</sup>、九州中央病院栄養管理室の渡辺<sup>11)</sup>、さらに国立病院機構大阪医療センターの鞍田<sup>12)</sup>は、ともに、実習先指導者の立場から、受け入れ先の課題を中心に報告している。梅澤は、病院において実習生を受け入れるということは、栄養管理部門は当然として他部門の協力が欠かせないこと、その事前の承諾を得るとともに、病院栄養士の実力を高める必要性を指摘している。渡辺は、受け入れ側の問題点として、①実習指導に十分な時間をさくことができないため、現場作業に従事させてしまっている②学生の資質・意欲に差があるため、低いレベルに合わせてしまう③受け入れ施設における管理栄養士の、院内での立場などにより、実習内容が制限される、をあげた上で、施設栄養士の日常業務の見直し、日々の自己研鑽の更なる必要性を指摘している。このような多忙な中での実習引き受けは「未来の管理栄養士が、輝かしいものであること」を願い、「日本国民の健康を支える栄養士の卵は確実に育ち、栄養士分野は専門職として存在しえると確信」できるからである。臨地実習はこのような専門職としての管理栄養士の成長を心から願う現場の管理栄養士の高い志に支えられて行われている。

さらに、多くの大学で、実習先や学生に対してアンケート調査等を行い、効果的な実習方法を模索している<sup>15) 16) 17)</sup>。

表 8 臨地実習に係る課題

		学生側の課題	大学側の課題	実習施設側の課題
全 体		<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨地実習の目的意識の明確化</li> <li>・自主課題を含む事前準備の徹底</li> <li>・実習中の学ぶ姿勢</li> <li>・社会人としてのマナー</li> <li>・コミュニケーション能力、専門知識、応用力の構築</li> <li>・事後報告のまとめと活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨地実習の心構えについての指導の徹底</li> <li>・事前・事後・個別指導の徹底</li> <li>・企画・立案、マネジメント能力、問題解決能力などの育成</li> <li>・実習施設との連携強化</li> <li>・実習施設の選定、質の確保</li> <li>・実習人数、時期等の検討</li> <li>・実習内容の啓蒙</li> <li>・事後指導のまとめのフィードバック</li> <li>・巡回指導のあり方の検討</li> <li>・他大学との合同実習についての検討</li> <li>・臨地実習に関するアンケート調査の実施と今後の指導への反映</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラムと臨地実習に対する理解と協力、実習内容の研鑽</li> <li>・実習生の受け入れ体制</li> <li>・学生の自主課題と施設がもつ課題の連動（共同研究などで相互の資質の向上をはかる）</li> <li>・実習施設による指導格差の是正</li> <li>・大学側との積極的な連携、情報交換</li> </ul>
科目による特記事項	臨地実習Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育者としての意識不足</li> <li>・体調管理等自己管理の意識高揚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・巡回指導マニュアル作成の必要性</li> <li>・実習先との連携、情報交換不足</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨地実習と栄養教諭教育実習の棲み分け</li> </ul>
	臨地実習Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児、高齢者とのコミュニケーションのとり方の理解と訓練</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・給食マネジメントの基礎知識の強化</li> <li>・実習施設概要周知の徹底</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習内容の研鑽・情報交換</li> </ul>
	臨地実習Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療人としての意識不足</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員も最新の臨床現場についての知見が必要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の自主課題と施設が持つ課題との連動</li> <li>・大学との協働による研究の推進</li> </ul>
	臨地実習Ⅳ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域をとらえる視点の構築</li> <li>・公衆栄養マネジメントスキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習施設や地域の特性にあった実習プログラムの基礎的な検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生への個別指導スキルの向上</li> </ul>

## 2) 本学の実践からの考察

本学の臨地実習の準備、実施、事後評価において多大な成果とともに今後解決すべき課題が明らかになってきた。本学臨地実習の課題を、学生側、大学（教員）側、実習施設側に分けて、表8に示すが、これらは、他の多くの養成校共通に抱えるもの、東北地方・宮城県という地域性、さらに本学特有のものが含まれる。

養成校共通の課題としては、実習目的を十分に理解し達成するための学生の指導と実習先との連携協力である。学生がいかに目的意識を持って各実習先の特殊性、独自性を理解し、積極的に実習に臨むかが重要である。また施設側としても実習内容を理解し研鑽を積み、他職種の協力も得られるなど施設全体の実習に臨む環境が問われるところである。そのためには大学側としてのきめ細かい対応や努力が必要と考える。実際の成果の中では2回の実習の積み上げの中で、多くの他職種の理解が深まり、施設全体での受け入れ態勢が構築された例もある。また学生の自主課題と施設が持つ課題の連動の中で共同研究発表の場が得られ、相互の資質の向上につながった例もみられた。

地域性の課題としては、この臨地実習の内容が栄養評価・判定が行われる場で直接人に接する実習を推進するよう、「臨床栄養学」を中心とし、「公衆栄養学」「給食経営管理論」のいずれかで行うとされているが、卒業後の進路（出口）の選択肢が限られていることである。本学としては4単位に3分野全てを含め、出口の可能性を拡げている。しかし学生の希望とは必ずしも合致しない場合もあり、また施設の受け入れ状況も課題が多く、多忙な業務の中で実習受け入れ辞退もある。

本学特有の課題として、3年生で実習4単位全てを実施していること（他の養成校もこの例が圧倒的に多いが）に関連して、実習時期の件がある。前述の学生の自己評価・感想からも推測できるが、自主課題への取り組み、事前の情報収集が先に行われた実習のまとめや報告書作成と併行する場合が見られ、実習準備に十分に時間が取れなかった点である。本学の場合、実習Ⅰは全員6月に実施、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳは他の授業との関連から7月、9月、11月に実施してきた。しかし施設の事情により時期は必ずしも希望通りにはいかず、また学生の希望と出口の可能性からもⅡ、Ⅲは2週連続実施を企画しているが、全員に対応できない状況である。今後は同学



年での4単位実習の検討も含め、施設との連携強化の中で信頼関係を構築し、効率のよい、学生の満足が将来につながるような実習になるよう配慮が必要である。

### 3) 社会と大学のネットワークという視点

管理栄養士課程の臨地実習は、栄養分野の専門職養成という枠組みを越えて、現代日本の高等教育のありようをも映し出している。今後の高等教育のあり方については、中央教育審議会から種々の方向性が出されているが、大学は一般社会から独立した存在ではありえず、経済的協力を含む双方向性の連携・協力が求められている<sup>1)</sup>。1997年(現)文部科学省、現経済産業省、現厚生労働省により「インターンシップの推進に当たっての基本的な考え方」が発表されて以来、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行う」インターンシップを単位化した実施校が年々増加傾向にある。文部科学省によるインターンシップ実施状況調査<sup>18)</sup>では「教育実習・医療実習・看護実習等特定の資格取得を目的として実施するものは除外」してあるが、学生時代からキャリアに関わる現場での体験を積むという意味で、その趣旨や目標は重なる部分がある。

仙台北百合女子大学の浅野は、論文「キャリア教育としてのビジネス・インターンシップ」の中で、キャリア教育の歴史を概観した上で、キャリア教育推進の背景と現状を分析し、キャリア教育の中でのインターンシップの意味として、「個人の自立と職業観・勤労観を育成するためには、大学だけでなく産業界と連携しながら、学生が自ら学ぶ教育への転換が必要である」と述べている<sup>19)</sup>。

教員、看護師、栄養士等の養成課程においては「資格取得のため」として従来から養成施設以外での現場における実習が義務付けられていた。インターンシップは、限られた分野で行われていた学生時代における現場での体験・研修が、企業を含む社会や学生の変化、ニーズにより、より普遍化傾向にあるとみることできる。また、それに伴い「資格取得のため」とされてきた学外での実習も様変わりしてきている。特に、管理栄養士の社会における活躍の場は多岐にわたり、その実習先の幅の広さは特記すべきである。

学生が大学外の組織・機関に係ることは、関係諸機関の協力・ボランティアな働きなくしてなしえないことではあるが、では一方方向的に、「学生がお世話になる」というだけのことかといえば、そうではない。過程において実習若しくは研修先の担当者の研鑽と資質向上につながる可能性が高く、そのかわりは双方向的である。管理栄養士の臨地実習の報告からもその傾向が伺える。

### 4) 高等教育の課題、授業プログラムの開発・授業改善の視点

大学進学希望者がほぼ全員大学に入学可能な「全入時代」を迎え、学生に対する教育の質の確保のため、大学教員は組織的に授業改善に取り組む必要が強調されている。2007年土持ゲーリー法一は、その著において、中央教育審議会答申(2005年1月)の「我が国の高等教育の将来像」に基づき、学生の質の変化に伴った授業改善の必要性を強調している<sup>20)</sup>。学生たちの能動的学習を促進すべく、教員は学生の授業評価、教員間の授業見学・評価、FD(ファカルティ・ディベロプメント)などの不断の営みから、授業改善に取り組まなければならない。高等教育の質の維持のために導入された第三者機関による認定評価においてもその授業改善への努力は重要な評価項目の一つである。

管理栄養士課程臨地実習は、「資格取得のため」に必要な授業と位置づけられるが、そのプログラム開発および実施の経過は、学生や実習先指導者の評価を常に取り入れながら、担当教員間での担当者会議（小規模なFD）さらに、学科内FDの繰り返しによる授業改善への試みであったとも言える。臨地実習巡回指導を学科教員全員が担当し、実習学生の動向を肌で感じながら、実習先指導者から直接情報を得て、報告書を作成すること、実習後の反省会を学科全体で行うことを通して学科全体が組織的に授業プログラムの開発及び改善に取り組んできた過程であった。そして、更なる授業改善に向けて、鋭意努力中である。現状把握－アセスメント－改善に向けての計画・実行さらなる評価を取り入れた現状の分析の繰り返しの中で、「臨地実習」という授業の改善がなされていくものと考ええる。

## 5. 最後に・・・今後の方向性をめぐって

2年度にわたる臨地実習の実施の中で、多くの課題が出された。「臨地実習」そのものが必然的に内包する課題、地域特有または、本学特有の課題を把握した上で、その解決にあたって本学科教員のキーパーソンの役割の自覚を新たにしている。学生の学内における教育はもちろん、実習先指導者との連携強化は大きな課題である。特に後者については学科教員のみでの努力では不可能であり、大学全体の支援が不可欠である。いずれの領域においても「経営の健全化」が至上命令とされている現実の中で、学外はもちろん学内に対するさらなる理解と協力を要請していくことになるだろう。

2006年度末には、学科FDを開催して4年間の総括と課題共有のため「臨地実習」を取り上げた。多くの課題の中で、学生の社会性、基本的な態度の形成などについては、入学直後からの教育が必要であることが痛感され、初年次教育として学科単位で実施される授業科目「基盤演習Ⅰ」において、2007年度から、大学での学びのモチベーションをあげ、学科に対する理解を深め、学習方法の修得を行うとともに、社会性の涵養を図るべく、対人マナーの基本と具体を取り上げている。

日々進化し続ける栄養の実践分野と密に連携をとりながら、学生たち一人ひとりの声に耳を傾け、今後ともよりよい授業を作り出すべく、努力していきたいと考える。

## 謝 辞

多忙な日常業務をこなしながら、本学の臨地実習をお引き受けいただいた諸機関・施設の責任者・担当者の方々をはじめとした全職員の皆様、また、臨地実習実施を支えていただいた学内のすべての教職員の皆様、さらに、多くの人の期待に応えるべく奮闘努力した学生諸氏に心より感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」平成17年1月28日
- 2) 藤沢良知『日本の栄養士教育・栄養改善活動－過去・現在、そして未来に向けて－』p 32、第一出版、1999年

- 3) 中村丁次「いま、なぜ臨地実習なのか」臨床栄養、106 巻、158～160、2005 年
- 4) (社)日本栄養士会・(社)全国栄養士養成施設協会編「臨地・校外実習の実際－改正栄養士法の施行にあたって－」2002 年
- 5) 尚絅学院大学総合人間科学部健康栄養学科編「食へのパスポート」2005 年版
- 6) 尚絅学院大学総合人間科学部健康栄養学科編「食へのパスポート」2006 年版
- 7) 松崎政三「臨地実習の計画と実施 臨床栄養学」臨床栄養、106 巻、161～164、2005 年
- 8) 西村早苗、吉岡有紀子、武見ゆかり、二見大介「臨地実習の計画と実施 公衆栄養学－「臨地実習」としての新しいあり方を求めて」臨床栄養、106 巻、165～170、2005 年
- 9) 山部秀子「臨地実習の計画と実施 給食経営管理論」臨床栄養、106 巻、171～175、2005 年
- 10) 梅澤真由美「臨地実習の実際 横浜船員保険病院」臨床栄養、106 巻、176～180、2005 年
- 11) 渡辺啓子「臨地実習の実際 九州中央病院」臨床栄養、106 巻、181～185、2005 年
- 12) 鞍田美貴「臨地実習の実際 国立病院機構大阪医療センター」臨床栄養、106 巻、186～191、2005 年
- 13) 西村早苗、石田裕美、武見ゆかり、渡邊早苗、石崎光子、太田和枝、吉田企世子、二見大介「管理栄養士養成における臨地実習プログラムの開発に関する研究－臨地実習に対する学生のニーズと実習後の自己評価－」女子栄養大学紀要、34 巻、115～121、2003 年
- 14) 西村早苗、石田裕美、亀井明子、武見ゆかり、吉岡有紀子、三浦理代、二見大介「管理栄養士養成における臨地実習プログラムの開発に関する研究 第2報－公衆栄養学領域、給食管理（学校）領域の実習時間別の検討－」女子栄養大学紀要、35 巻、103～110、2004 年
- 15) 梅木陽子・田中粹子・岩崎昌子・早渕仁美「臨床栄養学臨地実習のための環境整備の試み」福岡女子大学人間環境学部紀要、35 巻、69～73、2004 年
- 16) 神田知子、加藤元士、足立蓉子「管理栄養士養成カリキュラム改正に伴う臨地実習教育のための病院業務実態調査と効果的な実習方法の検討」山口県立大学生生活科学部研究報告、29 巻、9～15、2004 年
- 17) 北島葉子、川上祐子、横山純子、村上淳、高早苗、佐々木敦子、上田由喜子、菅淑江「臨地実習における実習効果を高めるための検討」中国学園紀要、4 巻、1～8、2005 年
- 18) 文部科学省「平成 17 年度インターンシップ実施状況調査結果」
- 19) 浅野浩子・植竹由美子「キャリア教育としてのビジネス・インターンシップ」仙台白百合女子大学紀要、10 巻、89～104、2006 年
- 20) 土持ゲーリー法一『ティーチング・ポートフォリオ～授業改善の秘訣』東信堂、2007 年

